



Humanity & Nature Newsletter

No. 18

February 2009

地球研ニュース

今号の 内容

P2

特集1●領域プログラムを語る
(地球地域学領域プログラム)

「ecosophy—地域のみんなの
知恵」をキーワードに
渡邊紹裕+児玉香菜子

P4

特集2●終了プロジェクトの報告
多角的なアプローチを繋ぐ試みが
新たな統合的研究のかたち
につながった

秋道智彌×横山 智×東城文柄

P7

特集3●シンポジウムの検証

第3回地球研国際シンポジウム

「島の未来可能性——固有性と脆弱性を超えて」

地球研国際シンポジウムの
役割と意義とはなにか

湯本貴和×阿部健一×川端善一郎×
遠藤崇浩×大西健夫

P10

特集4●プロジェクト研究発表会を終えて
参加者のレポートと総括

渡邊紹裕

内井喜美子+花松泰倫+
半藤逸樹+奈良間千之

P12

■ 前略 地球研殿——関係者からの応援メッセージ
地球研にしかできないことを。

河本和明

P13

■ 所員紹介——私の考える地球環境問題と未来
西表島分室で住民とともに過ごす日々
木本行俊

P14

■ お知らせ

イベントの報告、研究活動の動向、
研究プロジェクト主催の研究会(実施報告)、
イベント情報

チベット高原南東部「森のチベット」。薄明かりの紅葉に黒い繊細な毛のヤクがぬっと現れた。自然を信じる眼。ゆっくりと森の方に消えていった。林芝東部、標高3600m、10月。(撮影：奥宮清人)

「ecosophy——地域みんなの知恵」をキーワードに

話し手●渡邊紹裕 (地球地域学領域プログラム・プログラム主幹) + 聞き手●児玉香菜子 (中国環境問題研究拠点 拠点研究員)

地域における環境問題と地球環境問題とのかかわりを解明する地球地域学。現在、各プロジェクトがさまざまなアプローチから地域の環境問題に取り組んでいます。その成果をもとに、地球研の地球地域学を構築するためにはなにが必要なのか、渡邊紹裕・プログラム主幹にうかがいます。

今日は、地球地域学領域プログラムが、どういうお考えのもとに、どういうことに取り組んでおられるのかを具体的にうかがいたいのです。「地球地域学」って聞き慣れない言葉だし、じつはなにをねらっているのがよくわからないのです。

私もまだよくわかってない。(笑)

えっ？ プログラム主幹がそんなこと言ってもいいんですか？

誤解されるとまずいんだけど、じつは共有できる厳密な定義がまだ定まっていない。そういうなかで狙いをどう定めるかをじっくり詰めながら、「地球地域学」の名前を浸透させたいと思っています。

◎地球地域学がめざす高み

では、「地球地域学」という新しい枠組みをとおして、なにを明らかにしようかとされているのかをお話いただけますか？

地球研の領域プログラムのうち、循環、資源、多様性は、その切り口によって地球環境問題の現れ方や原因などを考えて、プロジェクトの成果をとりまとめようというものです。こうした各プログラムの成果を、地域のスケールで突き合わせて統合しようではないかというのが地球地域学プログラムです。

いわゆる地球環境問題はそれぞれの地域ごとに現れるけれど、その理解や対応を地域の枠のなかだけで考えることは、もはやできませんよね。地球規模の問題が各地域でどのように現れていて、地域の営みが地球全体の環境にどのように影響しているのか。こうした地球と地域と

のかかわりを見ていこうというのが地球地域学です。

「地球地域学」という言葉は、地域のそれぞれの仕組みと、その仕組みの相互関係や地球全体とのかかわりを見定めることをめざしていることを端的に表現していると思います。いまはまだ馴染みにくいかもかもしれませんが、しばらくするときっと定着します。新しい枠組みというのは、おおうにしてそういうものじゃないですか。

◎地域の問題と知恵の構造を理解することが基本

「地球地域学」の英文表記を「ecosophy」とされたのはどういう意図ですか。

エコは生態や環境、ソフィーは知恵ですから、「地域環境系の知恵」という意味でしょう。地球はどこにも出てこない。この言葉を少し前から使われている京都大学におられた高谷好一さん(現・聖泉大学教授)は「global ecosophy」とされましたし、地球研内部には「global area studies」という案もあったようです。しかし、地球環境学を構築する枠組みの中での研究領域の名前としては、地域の知恵を強調するecosophyは簡単でいいなと思っています。

地球と地域のつながり方を明らかにしようとすれば、どのようなアプローチになるでしょうか？

地域の問題と知恵の構造を理解することが基本でしょう。地域が抱える問題をみんながどのように認識しているのかを

明らかにすることが大切です。「みんな」というのは、その地域に暮らす地元の人だけでなく、地域の外に住んでいる人、行政や企業、地球規模で活動している研究者など、いわゆるステークホルダーとされる人たちも含まれます。それぞれがなにを問題と考え、どういう方向にもっていきたいのか、そういう地域の深慮を理解することです。

まずは「地域の知恵」を理解すること、それがecosophyですね。

地域の知恵には、地域における循環や多様性、資源に対する認識の仕方もあれば、そういうものを管理する技術や組織もあります。地域の知恵の構造は、地球規模のいろいろな現象と密接にかかわっている。このかかわりをただ把握するだけなら、観測や実態研究に留まります。地球環境学としては、将来どうすればよいかを提案することをめざして知恵を統合する。そうなると、地域だけでは解決できない問題もおのずと浮かび上がりますね。

たとえば、地球地域学領域プログラムのプロジェクトでいえば？

そう、たとえば梅津千恵子さんがリーダーのレジリアンス・プロジェクト。主な対象地域であるアフリカのザンビアでは雨の降り方の変動が農業や暮らしに大きな影響を与えているようです。しかし、これに対応する術を、地元の人はある程度備えているはず。その厳しい環境や貧しい農村における知恵がどのような



乾季畑の準備をする村人たち (ザンビア 南部州)
乾季の氾濫原で、土壌中に残っている水分を利用してさまざまな作物 (メイズ、サツマイモ、マメ、トマト・キャベツなどの野菜) を栽培する (撮影: 宮崎英寿)

現行の地球地域学領域プログラム

- E-02 流域環境の質と環境意識の関係解明
——土地・水資源利用に伴う環境変化を契機として
- E-03 亜熱帯島嶼における自然環境と人間社会システムの相互作用
- E-04 社会・生態システムの脆弱性とレジリエンス

編集●児玉香菜子

こたまたま・かなこ
 専門は文化人類学。地球研中国
 環境問題研究拠点研究員。人間
 文化研究機構地域研究推進セン
 ター研究員。二〇〇七年から現
 職。



わたなべ・つきひろ
 専門は農業土木学。研究プロジ
 エクト「乾燥地域の農業生産シ
 ステムに及ぼす地球温暖化の影
 響」プロジェクトリーダー。
 (二〇〇七年三月終了)二〇〇
 八年四月から地球地域学領域フ
 ログラム主幹。



もので、どうなると対応できなくなるかを探っています。

雨の降り方の変動は、地球規模の気候変動とかかわっているはずですが、そういうレベルの問題は地元の人たちの関心や知恵を越えています。雨を含む地球規模の気候変動の情報と、地元の人の雨に対する認識と対応についての理解とを重ね合わせて考えることで、地域における雨の降り方の意味を理解できるでしょう。さらには、将来見通される気候変動に対して、この程度に留まればこれまでの地域の知恵でのりきれる。でも、こんなふうに変化したら、これまで経験したことがないから、きっとあんなことで困るだろうな、というような構造が理解できるのではないかな。

◎プログラムを超えた情報の交換と共有が不可欠

「地域の知恵」を地域の改善や他の地域の理解に役に立てようというのですね。ねらいは少しわかった気がします、具体的にはどんな活動をしているのですか？

当初は「地球地域学とはなにか」という議論をしていました。だいたいこのあたりかなというところまで整理して、現在は「やりながら考える」という段階です。地域の知恵を把握する意味や方法を考えているのですが、プログラムに属している現行のプロジェクトでは、地域において環境問題がどう認識されているかに中心関心があるので、最近はそのぞれのアプローチの整理と情報交換に取り組んでいます。

私たちのプログラムでは、谷内茂雄さんがリーダーだった琵琶湖-淀川流域を対象にしたプロジェクト*1が終了しています。地域の人と環境とのかかわり、環境問題の認識は、地域を構成する「階層」によってかなり異なっています。農業集

落の単位ごとにもちがうし、用水を送配するシステムの範囲内でも、県レベルの行政区でも異なります。そういう状況のもとで、谷内さんたちはそれぞれの階層の人たちが現状と解決の方法をどのように理解しているのかを明らかにしようと取り組まれました。

関野樹さんがリーダーを務めるプロジェクトは2008年度に終了しますが、関野さんたちは環境意識を中心的な課題にしていて、地域住民が環境をどう理解しているのかを把握する方法の開発がメインの仕事です。ですから、谷内さんたちがやってきたことと基本的なところでつながっている。これからのとりまとめには、ぜひぶん参考になるでしょう。

そうすると、さっきの梅津さんがリーダーのプロジェクトにも役立つ。

そう。そこで、地域の人びとの環境理解をどのように把握するのか、それぞれの地域の知恵についての研究者のスタンスやアプローチの方法を比較しているところです。西表プロジェクトのリーダー高相徳志郎さんは、地元をしっかり入りこんで現地の環境改善に直接的に貢献することが研究者の役割だとされていますが、これも地域の知恵へのアプローチの一つの方法でしょうね。

こうしたアプローチは、どのような形で地球地域学の成果となるのでしょうか？

地域における環境問題についての認識を理解することは、「地域の知恵を理解する」一環となるでしょう。このような取り組みは、地球研のすべてのプロジェクトが進めているでしょうから、考え方だけでなくインタビューやアンケートの手法・技術などについても、プログラムを超えて情報交換を継続的に進めないといけないでしょう。

問題の認識のしかたや知恵の分析は継続して進めるとしても、地球地域学とし

ては、ある時点で具体的な問題の整理と改善にむけての提案をまとめないといけない。私は、多くのプロジェクトが水循環や水資源、あるいは流域を課題としてきたことから、当面は「流域管理」を重点の対象にしてはどうかと考えています。そうすれば、先ほども言ったように、この試みから地域と地球の問題の「からみ」が見えてくるはずです。

統合的流域管理や統合的水資源管理は国際的にも話題となっていますが、それに人と水とのかかわり、つまり「水の文化」の意義と役割にまで踏み込んだ検討を加えることで地球研ならではの提案をしたい。流域管理の問題は、本プログラムのプロジェクトだけでなく、福嶋義宏さんたちの黄河流域、中尾正義さんたちの中国の黒河、秋道智彌さんたちのメコン河、窪田順平さんたちのイリ河、白岩孝行さんたちのアムール川、さらにぼくたちのプロジェクトが対象にしたトルコ・セイハン川などなど、多くのプロジェクトの横断的なテーマになっています。それを地域の知恵の問題として考えることで、流域管理の基本理念に仕立てたいのです。

文化としての流域管理ですか。たいへんそうですが楽しみです。世界を相手にするとともに、プロジェクトメンバーが横断的にかかわれるようにする具体的な仕掛けも必要ですね。

そのとっかかりとして、2009年3月にトルコのイスタンブールで開催される「第5回世界水フォーラム」では、地球研はユネスコなどと連携してセッションを開催します。展示ブースも設けて、こうしたアプローチを世界に発信したいと思います。地球研の次回の国際シンポジウムでも、ぜひ取り上げて欲しいと思っています。それを可能にするにはプロジェクトの成果の統合が必要ですが、こうした試みをとおして、地球地域学はきっと逞しくなりますよ。

2008年12月8日 地球研「はなれ」にて

*1 E-01 琵琶湖-淀川水系における流域管理モデルの構築 (2008年3月終了)

多角的なアプローチを繋ぐ試みが 新たな統合的研究のかたちにつながった

研究プロジェクト「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究：1945-2005」(資源領域プログラム)

話し手●秋道智彌 (地球研副所長・教授) ×聞き手●横山 智 (熊本大学文学部准教授) ×東城文柄 (地球研研究員)

1945-2005年にかけての60年間のラオスを対象に、地域生態史を再構成する統合的研究を主題に掲げたこのプロジェクトは2008年3月に終了。プロジェクトの基本的スタンスや研究のユニークさ、地球環境に関わる研究に投げかけた視座と問題提起などについて、プロジェクトリーダーの秋道智彌教授にうかがった。

地球環境問題の解決と 地域生態史の解明

横山●「地域生態史」という視点がプロジェクトの主題になっていますが、対象としたラオスにはたくさんの異なる民族集団が暮らしていて、生態環境も多様です。そういう地域で生態史を構築する手法として、さまざまなアプローチを取られていますね。水や森林の利用からアプローチする方法、物質文化からアプローチする方法、人の生き様や生業からアプローチする方法、かつて雲南の調査で採り入れたように祭りやイベントなどからアプローチする方法……。そういったいくつもの手法を並行してやろうという計画は最初からお考えだったのですか。

秋道●かなりの部分は、そうです。ただ、プロジェクトの中心には資源をおきました。ですから、メンバーのみなさんには、生業複合とその変容、流通とかサブシステムの構造変化などを関心の中心においてもらうようお願いしました。

横山●資源を核にして、生業複合の姿を時代の流れのなかで捉えるということですね。

秋道●その変容を村落レベルで考える。同時に、政府の政策とかグローバル化の影響が村落レベルにも大きく影響してくることはある程度見えていましたから、それをみんなで共有しながらやろうと。ただ、全体としてどういう枠のなかでアプローチするかについては、悪く言えばバラバラでした。健康問題を扱う人は病気や栄養状態を調べ、森林をやっている人は資源としての森林をどう活用しているかを、歴史を担当する人は人間と自然とのインタラクションを調査するから碑文のようなものを研究する。

横山●いろいろなアプローチで研究して、出てきた結果を繋いでいくというイメージでよいのでしょうか。

秋道●糖尿病の患者が増えてきたことを明らかにするだけでは医学の研究にすぎま

せんね。しかし、そういう現象にも国家の政策や外部の影響、環境条件がなんらかのかたちで関わっているはず。では、そういうものがどのように絡んでいるのかなどをそれぞれフローチャートに整理してもらうことで、ある地域・空間において自分の関心との関係性が見えてきます(図1・2参照)。

ある地域において、ある事態が起こった状況をいろいろな要素を入れて分析することで概略だけでも理解できるかたちをつくれれば、おそらく別の人が別の枠組みで行なった研究にも通じるものがあるはずだ、他の人の研究内容と関わりをもってくるはずだという仮説がありました。そのように、ある地域社会を取り巻くさまざまな環境・資源に、どのような変化が起こったのかを明らかにする。これが私たちの狙いでした。

横山●そのように地域生態史を解明する、あるいは再構築することは、地球環境問題にどうつながるのですか。

秋道●森が減っているとか、魚の種類が減っているとか、いま地球環境問題と言われている現象の説明に、ゴム園に変わ

図1 退耕還林政策の生態史

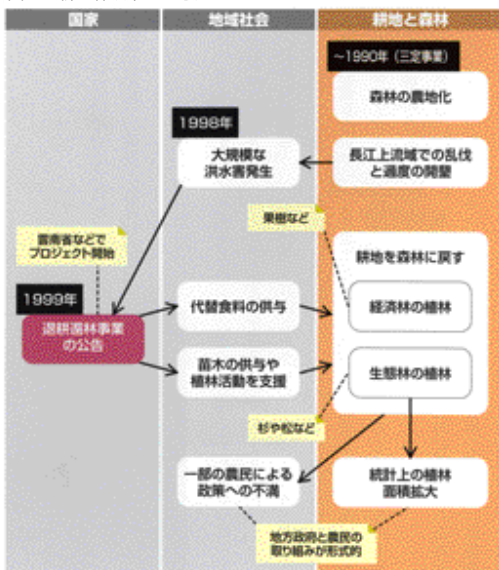
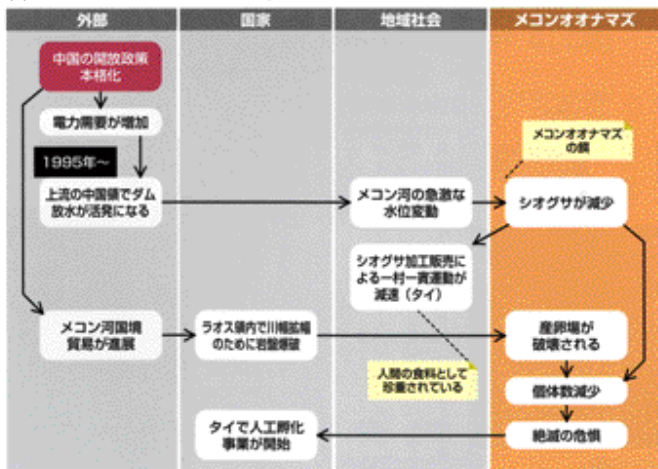


図2 メコンオオナマズをめぐる生態史



中国の森林保全政策(図1)やメコン河流域のダム開発による生物への影響(図2)が地域社会や生態系に与える影響を連関図として示し、これらを相互に検討することにより地域の生態史を因果関係の連鎖として示すことができる
出典：『図録 メコンの世界—歴史と生態』(弘文堂)

あきみち・ともや(中央)
 専門は生態人類学。研究プロジェクト「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究」(2015-2025)プロジェクトリーダー。資源利用の歴史的变化を生態史連関として再構成する試みを実施した(2008年三月終了)。
 よこやま・さとし(右)
 専門は地理学・文化生態学。研究プロジェクト「アジア・熱帯モンスーン地域における地域生態史の統合的研究」(2015-2025)に携わった。2003年から現職。2009年四月から名古屋大学大学院環境学研究科に異動予定。
 とうじょう・ぶんべい
 専門は地域研究・林学。研究プロジェクト「熱帯アジアの環境変化と感染症」プロジェクト研究員。2008年から現職。



造られたから魚が減ったなんていう結果を導き出すことが目的ではない。ゴム園になった歴史的な背景だったり、政策だったり、この山ならゴム園に最適だという理由でそうなったのなら、その自然基盤など、地域生態史のアプローチから地球環境問題に迫ろうということ。

たとえば、地理学を専門にする横山さんの仕事だったら、「チンタナカン・マイ(新思考)」という政府の政策が、先ほどのフローチャートの一端でいろいろな現象と結びついていることがわかった。一つの政策の変革が、水の中に石をポーンと投げたときのように波紋が広がって、それがいろいろな分野でずいぶん大きな影響を与えたことがわかりました。一つのアプローチだけで問題を把握しようとしたら、おそらく全体像は理解できなかったと思います。

なにをもって「統合的」と言うのか

横山●それが、タイトルに示す「統合的」研究ということですか。

秋道●めざしたのは、そういうフローチャートを80枚以上組み合わせたような大きな統合です。そうすれば、「こんなところにも繋がった」という発見や、「こう繋がっているようだけど、ほんとうかな」ということなどもわかってくる。「じゃあ、次回はその部分を調べてみよう」ということにもなる。

そういうなかで大事なものは、ストーリー性です。たとえば、トラクターの導入で使われなくなった水牛はどうなったか。水牛を売ったお金をどうしたか、水牛がゴム園の苗木を食べて弁償させられたりする問題もあるとかね。「なぜ中国人がこんなにも来たんだ」とか、そういう話とも繋がるようなストーリー性です。これはサイエンスではないが、この地域の人間と自然との関係を理解するうえで重

要なことです。

横山●統合的研究という点では、一般には文理融合とか学際的、通地的研究を統合的研究とよぶことが多いのですが、今回のプロジェクトは、そういうレベルでの統合ではないのですね。

秋道●DNAを研究している人、農学の人、人類学の人と同じ方角を向いて力を合わせた結果です。統合的研究というにふさわしい成果をあげることができました。ですからまさに、「やった!」という気分。

横山●今回のプロジェクトは、そういう新しい統合のかたちができのかなという感じですね。

東城●フローチャートに現れた大きな相関性は、プロジェクトの何年目あたりで見えてきましたか。

秋道●3年か4年目です。最初はフローチャートの空いている場所に適当に矢印を書いていました。しかし、複雑に絡んだ矢印が、全体としてどうなっているかは少しも見えてこなかった。そこで、これを時系列で整理することにしました。国家がどういふ政策を打ったとか、円高がどう響いたとかを地域変容の要因として取り込むには、やはり時系列で整理する必要がありますがありました。

東城●時系列で出てきた結果を整理する過程で、新たな関係性も見えてくるという側面もあったのでは……。

秋道●そうです。たとえば森林農業班のグループの仕事に、ナーサワーン村*1で人口が増えたら森林面積が減ったという分析結果があります。しかし、実際には一筆一筆の水田所有者にあたって、森をだれが、いつ開墾したかを調べたら、親から独立した子どもが森の所有者になって初めて森を開墾したことになっていたりする。ですから、40年くらいのズレがあったりする。因果関係でも、単純な時間軸では書けない問題があります。

横山●タイムラグみたいなものが……。

秋道●こういったズレを解消するには、テクニカルな対処法を含めて、どこかでうまい表現方法を開発しなければならぬでしょうね。フローチャートの矢印ぐらいでは十分に解明しきれないけれども、地球温暖化によるさまざまな影響を正確に把握するには欠かせない基礎データの話です。“Nature”とか“Science”の論文でも実証されていない課題の多くに共通する問題なのですよ。

複雑なものを複雑なまま捉えようとする学問的関心の重要性

横山●今回のプロジェクトでおもしろかったのは、複雑な現象を単純化しないで複雑なまま捉えようとしたところでしたね。

秋道●条件を単純化して因果関係を捉えようとするのが一般のサイエンスですね。しかし、それではものたりないというか、がんらい人間と自然との関係というのは複雑なものです。ですから、ある程度ルーズな部分を留保しながらに研究を進めました。「こういう目的のために是か非でもこの方法論でこうしてください」というのではなくて、ある程度の遊びというか、ちょっと浮気できるようなシステムにしました。「このあたりだけ捉えることができればいい」というようなフィルターをかけてしまったら、多様な問題には対応できないと考えたからです。

横山●ふつうは、因果関係を明らかにするための矢印はできるだけ1本ですませようと努力しますね。

秋道●それを統計的に有意差があるまでやらないといけない。

横山●これにたいして、今回のプロジェクトは、複雑なものは複雑なまま捉えようとしたところに意味があったと思います。単純化しないで、いろいろな要因が加わっていることをそのまま示そうという考

*1 ナーサワーン村

ラオス・ウドムサイ県ナモー郡に位置するタイ・ヤン族の村で森林農業班の調査ステーションを置いていた。かつてムアン・アイと呼ばれた盆地の小酋長国の中心であったため、いまでもアイ村と呼ばれている。

多角的なアプローチを繋ぐ試みが 新たな統合的研究のかたちにつながった



ラオス・ウドムサイ県でパラゴムノキ植林のために焼き払われた山。かつては焼畑二次林であったと思われる。ラオス北部ではパラゴムノキ植林が急速に拡大し、焼畑は姿を消しつつある。同時に生業の形態も単純化しつつある。(2007年1月/撮影：横山智)

え方ですね。

秋道●メコン河の例をあげると、雲南省にあるダムが放水が下流域のラオスやタイで急激な水位上昇、河岸の崩落、水草の減少などを起こしている。ある国家とか地域社会の環境について、その社会で起こっていることだけを見ていては問題の解決策は明らかにできない。ある程度ルーズな枠組みがないと、こういう因果関係に対処できない。未知の分野がまだまだあるのに、なにも最初から限定することはできないということです。

「多様な生業複合」の喪失の問題 を発信することの重要性

横山●ところで、生業複合といいますけど、いまは地域に新しくはいつてくるものの多くが、生業形態とは結びつかない傾向にありますね。ラオスのサトウキビ栽培にしても、中国人が種をもってきて、「何月になったらこれを植えて、芽が出た何日後にこの肥料を与えて……」とすべて指示する。そうして収穫期になるとまたやってくる。トラクターをもってきて土地も耕してくれる。

そうすると、ラオスの人たちは、土地と労働を提供して、1ヘクタールあたりいくらかのお金をもらう。そういう彼らのサトウキビ栽培が生業かというところ……。

秋道●賃金労働者。

横山●だから、農業というものがすぐに生業と結びつけられて、生態史にも関係しただけで、実態はどれも違っている。最近のグローバル化は、そのあたりのことを曖昧にしてしまう。

秋道●生業というものがそなえた特性——地域社会や地域経済、文化と結びつきながら複雑に展開する世界を逆に形骸化する、あるいはシンプリフィケーションしようとしている。今回見た限り、残念ながらその傾向がラオスのほとんど全域で起こっている。政府も、生物多様性を守ろうとする動きほど、人びとの生業複合を守ろうというような政策提起はしないでしょう。おそらく、森林そのものの保全とか再生というようなことを言っておいたほうが国際的にも通用するからでしょう。

それを指導するヨーロッパのコンサル系の人びとも、生業複合がそなえている文化的意義とか、多様な暮らしが生み出す人間社会の綾のような曖昧な部分をあまり評価しない。この問題は、地球環境問題の文脈でもうちょっと強く提言したほうがよいのではないかという気がしている。

生態史研究の方向性

東城●秋道プロジェクトではこれまで、フローチャートとして表れたもの以外にも、異なる事象のネットワークというか複雑系、そういったものを明らかにでき

る貴重なデータを多く蓄積してきたと思います。これは地球研のすべてのプロジェクトに共通する問題かもしれませんが、そういった貴重なデータをプロジェクトの外に有効に発信できる方法、たとえばアーカイブの構築などの必要があるのではないのでしょうか。

秋道●そのとおりですね。

横山●やはり、それをやらないとだめですね。5年間で得たデータをきちんとまとめあげて、それをオープンにしておいて、だれでもがアクセスできるような……。

秋道●80枚のフローチャートを全部合わせた図には疑わしい部分もあります。もうちょっと整理と応用を考えたい。だから、蓄積してきた情報へのアクセスの改善や、情報の外縁をさらに広げ、この仕事を継続することが必要。

横山●今回のプロジェクトでは、自分とは違うアプローチで研究を進めているたくさんの人たちと知り合うことができました。いろいろな課題を議論する場というか、共通の関心をもつ人たちの繋がりができたのも大きな成果だと思います。

秋道●そういう人の繋がりを利用して、広い意味での文化論とか、いわゆる自分の専門をちょっと逸脱した感じの、生態、歴史を含めた研究分野をやったらいかなと。そういう引き出しをたくさんもっている、そのうちなにかおもしろいテーマでシンポジウムができるかもしれない。そういうことにも繋がっていきます。

横山●それをやる場となると、プロジェクト終了後にメンバー有志で立ち上げた「生態史研究会」*2ですかね。人的なネットワークはできたので、それを蜘蛛の巣のように張りめぐらせて、生態史研究を深化させたいですね。

秋道●今後また生態史研究会を通じて、まあそれだけで全部というわけにはいかないけど、できたらいいかなと。

2008年12月19日地球研「はなれ」にて

*2 http://www.chikyu.ac.jp/ecological_history/index.html

シンポジウムの検証

第3回地球研国際シンポジウム「島の未来可能性——固有性と脆弱性を超えて」

地球研国際シンポジウムの役割と意義とはなにか

話し手●湯本貴和（地球研教授）×阿部健一（地球研教授）×川端善一郎（地球研教授）×
遠藤崇浩（地球研助教）×大西健夫（地球研プロジェクト上級研究員）



●内容

Session 1

Conceptualizing and Acting Island Environments, Past and Present

Session 2

Conservation, Livelihood, and Culture in Island Parks and Preserves

Session 3

Island Development in Local and Global Contexts

Session 4

Overview of the Symposium: Discussion and Conclusion

●開催概要

2008年10月22日(水)–23日(木)〈総合地球環境学研究所講演室〉

参加者：約100人

●後援：日本ユネスコ国内委員会

■なにを伝えようとしたのか——企画者として

湯本貴和(地球研教授)

政治や経済の中心と海によって隔離されている島々の多くは、世界各地で近代化が進むなかで、医療や教育面で大きく立ち遅れ、経済的な格差も歴然とする「離島苦」を味わってきました。反面、急速な開発から取り残されたことで、結果として豊かな自然や伝統文化が温存されて「宝石箱」として知られるようになりました。

このような島の二つの側面は、島を故郷として住んで不自由を余儀なくされる

人びとと、都会に住んで島にある種の憧れをもっている人びととの間に、大きな意識の違いを生んでいます。この「うち」と「そと」とが生みだすさまざまな葛藤のなかで、島に残された自然や伝統文化をいかに発展的に継承するかが、世界的に大きな課題となっています。

今回の国際シンポジウムは、ユネスコのBiosphere Reserve Programと密接に連絡をとりながら、世界各地の島々の現状を理解し、それぞれの島に起こっている

個別の危機を共有し、その適切な対処策あるいは不適切な対応に学ぶというものです。そのうえで、島の未来可能性を考えるためのどのような道筋がありうるのかを議論する場として企画しました。

セッション1では島に住む人びとの環境意識と環境考古学の面からアプローチし、セッション2では世界遺産（候補を含む）やBiosphere Reserveの島々の観光と保全をめぐる軋轢と伝統的文化の継承の問題を、セッション3ではグローバル化した世界でのさまざまな島の「開発」の問題を扱いました。セッション4では、以上の検討をふまえて、共通の問題点と未来可能性に向けての議論を深めました。

座談会■なにがどこまで伝えられたのか——参加者として

湯本●最初に、今回の地球研国際シンポジウムのテーマを「島の未来可能性——固有性と脆弱性を超えて」とした経緯を簡単にまとめておきます。

地球研が毎年開催してきた国際シンポジウムは、その年度に終了する地球研の研究プロジェクトがその成果を国際的に発信する場と考えてよいと思います。今年は、「亜熱帯島嶼における自然環境と人間社会システムの相互作用」（プロジェクトリーダー・高相徳志郎、通称・西表プロジェクト）

と「流域環境の質と環境意識の関係解明」（プロジェクトリーダー・関野樹、通称・IDEAプロジェクト）」の二つが終了するプロジェクトでした。

異なるプロジェクトを「内と外」の視点で切る

湯本●この二つのプロジェクトは、一見つながりが見えにくいのですが、次のような論理構成ならばつながることができると思いました。まず、西表プロジェクト

からは、「島」というキーワードがすぐに浮かびます。そして、「島」の特徴を考えたとき、「固有性」「脆弱性」といったキーワードを思い浮かべます。さらに、島の「固有性」を考えたとき、「内と外」という意識の問題がクローズアップされ、ここにIDEAプロジェクトとの接点が見出せると考えたわけです。

川端●「内と外」という見方はわかりやすかった。その一方で、この「内と外」が、「脆弱性」「固有性」とどのように関連する

地球研国際シンポジウムの 役割と意義とはなにか

九州から台湾までの間には、ひじょうにたくさんの有人島と無人島が存在する。多くの島々では「離島苦」と「宝宝箱」との相反する面を抱えている（撮影：湯本貴和）

座談会編集●遠藤崇浩＋大西健夫

のか、地球研で議論が続いている「未来可能性」とどのように関わるのかは見えにくかったように思います。

シンポジウムではじつに多彩な島が取りあげられ、どれも興味深いものでした。しかし、個々の事例があまりにも多岐にわたり、全体的な知見として何が得られたのかが不明確になってしまった感もありました。

共通する問題意識と客観性が貫く展開がほしい

阿部●たしかに、ミクロネシアのパラオ、竹富島、西表島など世界各地の事例は取りあげたが、いずれも「有名な」島々です。これは今回のシンポジウムがユネスコのBiosphere Reserve Programと密接にリンクしていたこととも関係しますが、取りあげられたのは観光客の増加が環境問題を引き起こし、それがユネスコの目を引くといった、いわば「特権的な」島々。その意味では、さほど多様ではありませんでした。

大西●素朴な疑問として、知名度の低い島のことを取りあげる具体的な方法についてすぐにはイメージが浮かばないのですが、それは可能ですか？

阿部●可能でしょう。研究者という立場から第三者的にいわゆる有名ではない島を研究している人はいるわけです。私は、「内と外」という視点だけではやはり不十分で、研究者という第三者的な視点をさらに処方することで、「固有性」「脆弱性」についてもより深く議論できたように思います。

湯本●「島」とひとくちにいつても千差万別なわけです。そこで私は、島の固有性・脆弱性を、「大きさ」「他の島との距離」「人口」「経済的豊かさ」といったパラメータで分類することを、シンポジウムを通じて主張しました。しかし、こう

した因子が各報告者の間で共有されていなかったため、各人が自らの思う島の「固有性」「脆弱性」をバラバラに論じることになってしまいました。

川端●シンポジウム2日目に、全体をまとめる役割の講演もありましたが、そういった発表をシンポジウムの最初にもってくるのも手でしたね。そのようにすれば、最初に議論をまとめる視点が提示されるので、よりわかりやすくなると思います。阿部●たとえばカナダのプリンス・エドワード島大学で島嶼研究を行なっているバルダチーノさん(G. Baldacchino)は、人文社会学的な視点から島をきれいに分類し、発表していました。いまから思うと、彼の視点に乗って議論することもできたのでしょうか。

柔軟性と工夫でひと味違うシンポが実現できるはず

大西●口頭発表と同時に、ポスター形式の発表も取り入れてはどうでしょうか。ポスターを前にして、より緊密なコミュニケーションができる。世界中の研究者と学術的な交流をする場を提供するのも、国際シンポジウムの重要な役割のひとつです。阿部●そうですね。

川端●それで思いついたのですが、会議形式に終始するのではなく、フリータイムを設けるのもよいかもしれません。海外の研究者に地球研の研究フロアに降りてきてもらい、お茶でも飲みながら討議するという企画や、国際シンポジウムと市民セミナーをリンクさせるなどの方策もあります。これが実現すれば、地球研を会場にするメリットが二倍、三倍になる。

大西●外国から多数の研究者を招くのは、手続き的にもたいへんなことはわかるのですが、講演依頼の段階であらかじめこちらからキーワードを提示することもできたのではないのでしょうか。そうすれば



総合討論もスムーズに運べるし、議論の焦点があらかじめ提示されているので、より有益な議論ができるように思います。阿部●当日の進め方については、まだまだ工夫の仕方がありますね。企画運営に関しても、皆さんのご意見を参考にさせていただきます。

認識科学にとどまるのではなく、設計科学への展開を期待する

遠藤●川端さんの指摘にあったように、第1回の国際シンポジウムに比べると、「未来可能性」という概念が前面に出なかったために、かえって全体の焦点がぼやけてしまったという印象がありますね。湯本●環境問題は自然と人間とがおりなすやりとりであり、その「自然と人間の相互作用環」の解明は地球研の主要課題。他方、未来可能性は現存の格差などを持ち越さないかたちで環境問題の解決はかる姿勢であり、持続可能性という言葉が取りこぼしていた側面に光を当ててものです。

こうした視点に立つと、今回の国際シンポジウムでは「島」をめぐる環境問題の現状については多彩な報告があったが、その解決策の提示までには至らなかったということになるのでしょうか。

大西●現状認識と同時に、解決策を提示するという二つを2日間のシンポジウムで行なうにはそうとうの準備が必要で、下手をすると無いものねだりになってし



(右から)

えんどう・たかひろ

専門は政治学。研究プロジェクト「都市の地下環境に残る人間活動の影響」助教。二〇〇四年から現職。

かわはた・ぜんいちろう

専門は微生物生態学。研究プロジェクト「病原生物と人間の相互作用」プロジェクトリーダー。二〇〇五年から現職。

ゆもと・たかかず

専門は生態学。研究プロジェクト「日本列島における人間―自然相互関係の歴史的・文化的検討」プロジェクトリーダー。二〇〇三年から現職。

あへ・けんいち

専門は環境人類学、相関地域研究。研究推進戦略センター成果公開・広報部門長。二〇〇八年から現職。

おおにし・たけお

専門は水文学。研究プロジェクト「北東アジアの人間活動が北太平洋の生物生産に与える影響」プロジェクト研究員。二〇〇六年から現職。

原則はやはり維持すべきだと思います。

中心となるプロジェクトが積極的に企画提案する姿勢は不可欠

阿部 ● 今回のシンポジウムでは、地球研内部からの発表は、西表プロジェクトとIDEAプロジェクト以外では、「アラブ社会におけるなりわい生態系の研究（リーダー・細田浩志）」の研究員である中村亮さんだけでした。地球研のプレゼンスという意味においても、若手の研究者を含めた地球研内部からの発表がもっと多くてもよかったですと思うのですが、どうでしょうか。

川端 ● 賛成です。シンポジウムはその内容が充実していることはもちろんのことですが、形式も重要です。国際シンポジウムを告知するとき、地球研は何を発信するのかが厳しく問われる。そのような意味でも、地球研内部からの発表をもっと増やしてもよいと思います。

大西 ● 第1回の国際シンポジウムの際は議長団会議をつくって企画の段階から会議をオープンにし、企画と運営に関する議論を重ねました。それに比べると、今回はそうした風通しの良さがあまり感じられなかった。

阿部 ● それは重要ですね。次回の準備段階では、誰でも参加できる会議を設ける、あるいはプロジェクトリーダー会議などを通じて準備状況を伝えるといった仕組みをつくりたいと思います。イニシアチブは終了を控えたプロジェクトが取るべきですね。そもそも5年も研究して何も発信する企画がないというプロジェクトならば存在意義がないわけですから。

川端 ● そうした仕組みがうまくいく条件は、やはり国際シンポジウムを運営するうえで中心となるプロジェクトが積極的に企画提案することです。そうした叩き台をもとに皆で内容を討議すれば質の高いシンポジウムを組織できますよね。

2008年12月5日 地球研「セミナー室」にて

もう危険もあります。今回は最初から、「現状認識に主眼を置く」と位置づけてもよかったかもしれませんが。「多様な島に関する事例を豊富に紹介する」とこと自体が世界的にあまりなされていないならば、それだけで新規性を出せる。

いずれにしても、企画段階でどこに軸足を置くのかを明確にすべきだったと思います。

阿部 ● 今回のシンポジウムは認識科学としてはおもしろいものだったが、設計科学への展開が不十分だったと思います。とはいえ、設計科学への展開は一朝一夕でできるものではない。それこそ、我々地球研の所員が日々努力する必要があるということでもありますね。

地球研の成果とメッセージ発信の場でもある国際シンポ

湯本 ● 私は、国際シンポジウムの企画は終了プロジェクトの「義務」ではなく、「権利」だと考えています。地球研全体のノウハウを使って、自分たちの研究成果を世界に向けて発信できるわけですから。その意味で内部のpreliminary sessionを含めて、さまざまな意見交換をするのは当然のことだと思います。

これに関連していえば、いつも反省するのですが、助走期間をもっと取るべきでした。地球研内部から発信するメッセージを形づくるにも時間が必要です。さらに、「国際シンポジウムは個々のプロジ

ェクトを越えて、所全体のメッセージを発信する場である」という認識を醸成する時間が必要です。この面でまだまだ改善すべき点がありますね。

阿部 ● その反省を次回の国際シンポジウムに生かすべきです。次は「北東アジアの人間活動が北太平洋の生物生産に与える影響評価（リーダー・白岩孝行）」と「都市の地下環境に残る人間活動の影響（リーダー・谷口真人）」が国際シンポジウムの中心プロジェクトになる予定ですが、前者が提唱する「巨大魚付林」といったコンセプトや、後者の注目する「地下環境問題」について全所的に意見を交わすことが肝心だと思います。

大西 ● 国際シンポジウムが終了プロジェクトの成果報告の場として位置づけられてきた経緯はわかるのですが、私は必ずしもこれにこだわる必要はないのではないかと考えています。たとえば、新しいコンセプトを提示するような問題提起型のシンポジウムの場合には、走り始めたばかりのプロジェクトも関わることできるように思うのですが、どうでしょう。

遠藤 ● それは、国際シンポジウムを「終了プロジェクトの成果報告の場」として捉えるのではなく、「複数のプロジェクトの相互交流から生まれた成果の場」として位置づける発想ですね。だから、終了プロジェクト同士という組み合わせであってもよいし、いくつかのプロジェクトを統括するプログラムが単位になる場合があってもよいかもしれません。いずれにせよ、複数のプロジェクト間の相互交流がベースになるかと思っています。

湯本 ● そうした柔軟性はもちろん必要だと思いますが、終了間際のプロジェクトは多額の研究資金を使ったわけですし、年次を経たぶんだけ研究成果の蓄積もあるわけですから、国際シンポジウムは終了プロジェクトが主導して行なうという



八重山諸島の竹富島は、人口340あまりの島であるが、重要伝統的建造物群保存地区など9つの国指定有形・無形文化財を擁している。旧暦10月に行なわれる種取祭は数多くの芸能が奉納され、祭が近づくと毎夜遅くまで稽古が行なわれ、若い世代への伝統の継承に余念がない(撮影：湯本貴和)

参加者のレポートと総括

総括●渡邊紹裕 (研究推進戦略センター戦略策定部門長、プログラム主幹)

■開催の趣旨とねらい

恒例の「プロジェクト研究発表会」が、昨年末の2008年12月10～12日にかけて開催された。研究所にとっては、1年を通じてもっとも重要な行事の一つである。3日間にわたって続く真剣な報告と質疑応答は、かなりの集中と緊張を強いる。

今年度は、プロジェクト研究の「所内の検討会」の性格をいっそう明確にし、基本的にはプロジェクト関係者限定の公式な場とした。報告資料は基本的に関係者限りとし、研究内容・検討内容の所外への開示は認めないことにした。

立本所長からも開催に際して、「この会が全プロジェクトの進捗と成果の報告会として、唯一の全体討議の場である」ことが強調された。そのうえで、プロジェクトリーダーには要点を簡潔に説明することと、参加者には真剣で建設的な討議を効率的に進めるよう、改めて要請があった。

この研究会を企画・運営する「プロジェクト評価委員会タスクフォース」からは、昨年度の反省にもとづいて、さまざまな分野・立場からの参加者に、わかりやすく、かつ厳密な内容と精確さを失わない発言への期待が述べられた。

発表会では、領域プログラムごとに、進行中の各段階の研究プロジェクトからの報告と質疑、及びプログラム主幹によるとりまとめが行なわれました。また、研究推進戦略センターの活動報告、研究成果の発信、CR2 プロジェクト(終了2年後)の事後評価、さらには研究所全体の研究展開についての報告と討議が行なわれた。

なお、発表会初日には、本年度のFSの3課題の発表と質疑応答があり、その内容は、プロジェクト評価委員会に付議する課題の選考に当たる所内プロジェクト審査委員会の審議に供された。

*

会場での質疑や討議では参加者からさまざまな意見が出されたが、若手研究者からは以下のレポートをいただいた。

■ レポート1

発表会での指摘や助言が現場に確実に反映される体制づくりを

内井喜美子 (地球研プロジェクト研究員)

地球研のプロジェクト研究発表会に参加するのは、昨年に続き二度目です。発表会の全体的な印象として、昨年度よりもよくオーガナイズされていると感じました。

冒頭に会議運営側から、「できるだけ対話を意識した質問やコメントの出し方をするように」と促されました。これを受けて質問者からは、一方的な意見や批判だけでなく、これまでのプロジェクト進捗状況において評価できる点、改善すべき点、欠けている点など多岐にわたる観点から、今後のプロジェクト展開を意識した助言や提案が出されました。このことは、初期段階にあるプロジェクトに対してとくに顕著でした。各プロジェクトにとって、他分野の研究者からの意見を集約できる貴重な機会になったと思います。

一方で、終了に近づいた後期プロジェクト

の達成度に関しては批判めいた意見も目立ちました。この点について、私自身が感じたことを少し述べたいと思います。

プロジェクトの統括責任が、主としてプロジェクトリーダーにあることは明らかです。しかし、地球研がプロジェクト方式で成り立ち、プロジェクトの成果が地球研自体の評価に直結する以上、すべてをリーダーとプロジェクトまかせにするのではなく、地球研としてもなんらかの解決策を模索すべきではないでしょうか。

プロジェクトは評価委員による審査を定期的に受け、研究発表会の場でもいろいろ意見が寄せられますが、それがプロジェクトに活かされるか無駄になるかはプロジェクトしだいというのが現状であると理解しています。終了して2年めのプロジェクト(CR2)の最終報告の中でも述べられていたように、例えば評価委員は評価・審査の役割だけでなく、アドバイザーとしても機能するようなシステムづくりなど、地球研組織としての体制も改善する必要があると感じました。

■ レポート2

「地球環境学」に対する認識のズレを修正し、建設的な議論の場を

花松泰倫 (地球研プロジェクト研究員)

初めてプロジェクト研究発表会に参加する私には、前日間で聞こえてきた噂から受ける印象は最悪であった。建設的な議論の雰囲気はなく、徹底的にこき下ろすらしい……。ある種、怖いもの見たさで楽しみにしていたのであるが、期待値が低かったせいか(?)、全体としてポジティブな印象を受けた。建設的な議論にしていこうとする雰囲気は感じられ、このような場が持たれること自体、意義のあることだと率直に思う。

ただし、議論の中身には、少し問題があるように思う。各プロジェクトへの多様な評価軸の中でもっとも気になったのは、「地球環境学」にどう貢献するのかというものである。その裏には言うまでもなく、地球研的なものを体現する「地球環境学」という怪物をどう飼育するかという難問が横たわっている。しかし、この怪物に対する認識や接近方法について、地球研内部で大きな温度差やギャッ

プがあることを、今回とても強く感じた。

たとえば、それぞれのプロジェクトの成果は、他の地域・対象で見られる環境問題の解決に応用可能なものを求められているのか、それとも「地球環境問題」の解決に直接的に資することを求められるのか、あるいは、他の環境問題や「地球環境問題」の解決に直接には役立たなくても、たんに「見せ方」の問題としてそれらに対して何らかのインプリケーションを示せばそれでよいのか、いまひとつはっきりしない。この点で議論がすれ違っていると感じる場面が何度もあったし、この不明確さが逆に各プロジェクトの目標設定のしかたにも混乱を生じさせているのではないかと印象をもった。

この「地球環境学」の定義の問題は、やはり発表会とは別の機会に早急に取り組むべきであろう。昨年度からの試みであるプログラム制の導入も、未だ明確な答えを提供できていないように思う。発表会ではせっかくなさんの時間を使って討議するのだから、目標や評価軸がブレていてはもったいない。しっかりと共通認識をつかった上で議論すれば、より充実した発表会になると思う。

2008年度プロジェクト研究発表会

2008年12月10日(水)～12日(金)
(コープイン京都)

●報告者

うちい・きみこ (地球研プロジェクト研究員)
 専門分野: 微生物生態学、所属プロジェクト「C-06 病原生物と人間の相互作用環」
 はなまつ・やすのり (地球研プロジェクト研究員)
 専門分野: 国際法学、所属プロジェクト「C-04 北東青地あの人間活動が北太平洋の生物生産に与える影響評価」
 はんどう・いつき (愛媛大学沿岸環境科学研究センター助教)
 専門分野: 大気・海洋学、地球システム科学
 ならま・ちゆき (地球研プロジェクト研究員)
 専門分野: 自然地理学、所属プロジェクト「R-03 民俗/国家の交錯と生業変化を軸とした環境史の解明——中央ユーラシア半乾燥域の変遷」

■レポート3

いざ来ませ、
地球研産の地球環境学者たちよ

半藤逸樹 (愛媛大学沿岸環境科学研究センター助教)

地球研はさまざまな分野の研究者の寄り合い所帯である。自分の所属する専門分野ではお山の大将に脅えて発言できない研究者も、他分野のお山の大将には遠慮なく批判的な意見を言える利点(?)がある。実際、報告会とは、プロジェクトリーダーが集中砲火を浴び、所内でコミュニケーションの取れていないプロジェクト内およびプロジェクト間の実情を公に晒す場でもある。また、所員の一人一人が地球環境学者として教養を高め、共通認識を醸成し、文理融合を前提とするプロジェクト研究を議論する場であることを忘れてはならない。

今年度の報告会でとくに気になったことが二つある。一つは、大型プロジェクトの未経験者が地球研のプロジェクトリーダーになれる時代(ゆとり研究時代)が終わったことを実感させられる意見交換があったことである。これは、ここ数年で地球研プロジェクト間の

能力格差が際立ったためであると思う。その一方で、プロジェクト研究の学際性→分野横断性→文理融合性は具現化されていないように思う。実際、文理融合を掲げる地球研において、未だに“文系”、“理系”という単語を乱発しているプロジェクトも少なくない。

もう一つは、研究員からの発言が少なかったことである。研究員は、キャリアパスを意識して積極的に発言すべきだと思う。忘年会で不平不満を漏らすのではなく、公の場で建設的な意見を述べてこそプロの研究者として認められるのである。地球研のように若い研究者の意見を採用している研究機関は決して多くはない。若い地球環境学者が成長する基盤があるのも地球研の長所であることを再認識してもらいたい。

地球環境学を冠する書籍や組織が増える今日、地球研の研究者は、最終学歴でなにを専攻したかではなく、地球環境学者としてなにを創造しているかを問われている。所内外のセミナーに積極的に参加し、文理融合性と地球環境学の世界観を築き、世界に類をみない地球研プロジェクトの遂行を切望する。

■研究発表会の検証と現場への反映

ここに紹介したレポートで皆がふれているように、この研究発表会は身が引き締まり、気合いのはいる重要な場である。プロジェクトやプログラム、研究所全体の課題も、まだ十分とは言えないにしても、ある程度絞られ、全所的に共感されたように思う。その意味で、一定の達成感をもって終了することができた。

今回とくに参加者に共通した関心・話題は、内井さんがレポートのなかで端的に整理しているプロジェクトリーダーの役割と責任の問題だった。地球研のような大型プロジェクトにおいて、課題の設定と現実の遂行にどのようなリーダーシップを発揮すべきか、プロジェクト研究員など主要メンバーの意見や活動をどのように掌握・活用するかが、プロジェクトの進捗と目標達成にいかにか重要であるかが改めて浮かび上がった。さらに、各プロジェクトの状況にプログラムや研究所がどのように関わるか、その具体的な内容や方法にも関心が及んだ。

こうした状況を踏まえ、各プロジェクトリーダーには、発表会での議論と対応方法を文書にまとめてもらい、これに全プログラム主幹がコメントと対応策の提案を寄せることになった。

地球研にきて間もない花松さんが感じられたように、地球環境学の課題や研究方法、プロジェクトの進め方には、所内でもなお、様々な考えがある。会場での議論や認識の違いを埋めるような会話が日常的に展開する環境整備が必要であろう。

奈良間さんが指摘するように、地球研の卒業生の貴重な経験を進行中のプロジェクトに活かすシステムを整備する必要もある。今回は半藤さんなど何人かの若手卒業生に参加いただいたが、かつてのプロジェクトリーダーの方がたにも知恵を提供いただく機会を増やしたい。

次年度からは、この研究発表会のあり方を、プロジェクトリーダーの役割も視野に入れながら検討するワーキング・グループを設けることになった。今回、貴重な意見や提案をしていただいた若手の代表にも参加していただく。資料の作成と記録の方法、討議の記録と公開方法なども、この場で検討することになる。

■レポート4

所属するプロジェクトの位置
確認できる場

奈良間千之 (地球研プロジェクト研究員)

今年の発表会では、領域プログラムの枠組みを反映した発表プログラムが生まれ、予備研究(IS)から本研究にいたるすべてのプロジェクトの発表を聞くことで良い点がいくつかあった。

FSからFRの終了する5年目までの発表を順番に聞くことで、参加者は最終年に近づくほど成熟度が増しているプロジェクトの成長過程や最終形をイメージすることができる。また、同じ年に始まったプロジェクトの進捗状況を比較することで、所属するプロジェクトの横断的なかわりを示す共通意識の形成、新たな知見、地域性と地球環境問題とを直結させる問題意識などについて、足りない点やうまくいっている点など、所属プロジェクトの位置を確認できる。

昨年初めて参加した私もそうだったが、発表会への参加は、新しく地球研に着任した所員にとって、プロジェクトの質疑応答とお

して地球研の地球環境問題に取り組む「熱さ」を感じることでできる場である。地球研の地球環境問題へのアプローチを認識するよい機会ともなっている。

発表内容については、最終年を迎えるプロジェクトが増えてきたが、プロジェクトの最終形はさまざまだ。研究のターゲットと統合して得られた知見が明確に提示されていない中途半端な状態のものもあつたり、新たな課題が出てきても、研究期間は終わったということで研究が打ち切りになる点も問題だ。テーマの設定、研究対象地域、人文科学と自然科学との統合などについても、うまくいった点、いかなかった点について、終了プロジェクトから提示してもらい機会があつてもよい。

例えば、対象が特異な問題をもっていて、ローカルになればなるほどグローバルな環境問題に直結させにくい面を感じることがある。領域プログラムは、問題意識の継承や、より発展した統合知の構築のために設置された。同じ課題を共有する各プログラム内で、終了プロジェクトの手法とともに、その課題を生かすことで、活動中のプロジェクトが抱える問題に取り組んでいけるのだと思う。

地球研にしかできないことを。

河本和明 (長崎大学環境科学部 准教授)

2002年3月に私は地球研に着任した。新しい理念に基づいて創設されたばかりの研究所に対し、所員の多くは同じような興味・関心を持っていたように思われる。「地球研はいかなる研究所であるべきか」、「どのようなプロジェクトが地球研らしいのか」、「地球環境学とは何なのか」。若手研究者の有志は、所属プロジェクトやバックグラウンドを超えて地球研という新しい実験場での共通の関心を模索する活動、即ち「若手会」に集まった。

地球研と若手会

年1回の合宿形式の勉強会をはじめ、普段でもそれぞれの興味・関心について語り合った。同年代の気安さか、かなり遠慮のない議論もあった。若手会は一枚岩の圧力団体として所長や主幹に対峙するという存在ではなく、むしろ意見の相違や温度差も少なくない緩やかに結びついたコミュニティとして地球研への提言を行った。

いま振り返ると小生意気な物言いや青臭い意見もあったと思う。しかし義務でもなければ、評価されるわけでもないこの活動に気持ち一つでコミットしていった。ともすればただの腰掛けに過ぎない地球研に対して責任の希薄な任期付きの所員たちが時間と労力を惜しみなく使った。その大きな理由は、「自分たちが地球環境学の構築に貢献する」という自負と期待感であっただろう。任期付きという運命のため、メンバーの多くは地球研から物理的には離れてしまったが、今後もまた気持ち一つで繋がれると私は信じている。

現在の地球研に対して——統合知の構築への期待

2008年12月のプロジェクト研究発表会に参加させていただいた。議論を通して今後の地球研にいくつか希望を見た気がした。例えば領域プログラムは地球環境問題を捉える枠組みの一つとして地球研の売りになる可能性がある。今後は世界の研究動向のレビューを進めて、より斬新な独自の切り口を提出できるかもしれない。また研究推進戦略センターによる司令塔的役割の始動は効果的な研究所運営に供するだろう。しかし以下にいくつか指摘したい点を述べる。



2005年度若手会合宿の1コマ。地球研に関するさまざまな議論が行なわれた

地球研による講演会やフォーラム等の集いは多いが、認識や理解がどこまで深まったのか、どのようなヒントが得られたのか、つまり集いの前と後で何がどう変わったのかが明確になっていない場合が多いようだ。本を出版することに留まらず、その成果を地球研のメッセージへと昇華させる努力が必要ではないか。

あれこれと新しいことを試みるのは勿論大事である。しかしこれまでの試みの総括は十分かつ有効に行われているのか？ 質疑応答でせつかく良い提案や指摘があっても、それを取り入れる仕組みはあるのか？ 言いつばなし、やりつばなしでは得るものは少ない。

例えば第1回国際シンポジウム(2006年11月開催)では、初年度にスタートした5つの研究プロジェクトの成果を統合するという当初の理想に届くことはできなかった。この失敗から学ぶことは大きい。環境史など昔の出来事を研究している人も多いのに過去の経験に反省がないならば何とも皮肉である。

地球研の今の最大のチャレンジは統合知の構築であろう。それは地球研にしかできないことだ。その道は困難だが、全所的な議論を急ぐべきだろう。

*

上賀茂キャンパスの建設時、屋根に使われる瓦の裏に私は「誇り高き地球研へ」と書いた。この願いごとが叶う日を心から楽しみにしている。



かわもと・かずあき

専門は大気物理学・衛星気候学。人工衛星データを用いた大気汚染物質による雲と雨への影響や地球のエネルギー収支に関する研究に従事。2002年から5年間地球研助手として研究プロジェクト「大気中の物質循環に及ぼす人間活動の影響の解明」にコメンターとして参画。同プロジェクト終了後の2007年から現職。

バンコクでの1枚

所員紹介—私の考える地球環境問題と未来

西表島分室で住民と ともに過ごす日々

木本行俊 (地球研プロジェクト上級研究員)

西表島美田原浜で撮影。ウミクサ藻場の中でもっとも大型で、ひときわ目だつウミショウブ。手前には熟した果実が見える (撮影：木本)



イリオモテヤマネコやサンゴ、マングローブなどに代表される自然環境、それに伝統芸能などの独自文化が残っている西表島は、環境問題が凝縮して現れている地域の1つであり、人間活動と自然環境との相互作用環の研究に好適な場であるといえます。人口約2,400の西表島は現在、自然環境と、地域の伝統文化の継承と住民の生活基盤の充実とをいかに両立させるかという難しい問題に直面しています。

人間と自然との折り合いをどうつけるか

自然環境と人間の社会生活との折り合いをどうつけるかというのは非常に難しい問題です。住民の意見集約の方法一つをとっても様々な問題が生じ、合意形成に至るためには、情報提供の方法も重要になります。

プロジェクトでは、研究もさることながら、西表島の抱える環境問題の現状と考える対策を整理して、当事者である地域住民が把握しやすいように提示しよ



採集したウミクサの仕分作業中の分室スタッフ(手前が筆者)

うと取り組んでいます。自分たちの島、地域の未来像を、用意した選択肢の中から地元住民が自ら選択できることが重要であるとの認識が根底にあるからです。

ウミショウブの群落を相手に2年間

私は、西表島の海に生える被子植物であるウミクサ(海草)の現状と人為的影響を把握するための研究班の一員として西表島分室で研究を行なっています。植物群落の保全を考える上では、果実・種子生産が健全に行なわれる環境を残すことが重要ですが、通常の陸上植物に比べて、海域に生育するウミクサ群落の生態に関する情報は十分ではありません。琉球列島に生育するウミクサ類に関しては開花率、結実率すら満足な情報が無いのが現状です。私たちは、日本では西表島・石垣島にしか生育していないウミショウブの群落の開花と結実に特に着目し、西表島分室という地の利を活かして野外での追跡調査を2年間行なってきました。

調査・研究を円滑にする住民の理解と協力

長期の調査は、地元住民の理解と支援なくしてはできません。当初、研究活動

についてどのように周知しようかと思っていた矢先、ある地域行事後の慰労会の和やかな雰囲気の中で、当時の公民館役員の方から「海岸埋め立て工事はウミショウブに影響はないだろうか？ ウミショウブは今後もちろんと花が咲くだろうか？ 心配なので調べてほしい」という要望を頂きました。この要請は調査の実施の必要性をどのように説明しようかと思案していた私たちにとってまさに渡りに船でした。

その後も地域住民の理解と協力を頂き、円滑に調査を進めることができました。この他にも、必要な情報やご自分の意見、問題点を率先して指摘して下さる住民の存在を何よりもありがたく感じると同時に、私たちの担っている責任の大きさも痛感しました。

上述の調査に関しては、浅瀬に生育するウミショウブの重要性を示唆する成果を得ることができましたので、ご質問を頂いた方をはじめ、地域の方がたに徐々にお伝えしています。現在進めているその他の調査結果についても、できるだけ広く住民の方がたにお伝えできるように努めたいと思っています。

■リーダーからひとこと

高相徳志郎 (地球研教授)
ウミクサ類の生息域は、しばしば「海の森林」と表現され、その重要性について言及されることがあるが、陸上の森林にくらべて研究が極めて遅れており、一般への紹介も乏しい。長期間にわたるモニタリング調査等を基にしたウミクサ類の研究に取り組む木本さんは、とりわけ亜熱帯域においては、まぎれもなく第一線の研究者である。今後の研究活動と成果の発信に期待したい。

きもと・ゆきとし

■略歴

2004年3月 京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了、博士(理学)
2004年4月～2006年3月 総合地球環境学研究所・非常勤研究員
2006年4月～現職

■専門分野 植物分類学、植物形態学

■地球研での所属プロジェクト

「亜熱帯島嶼における自然環境と人間社会システムの相互作用」

■研究テーマ 亜熱帯域における熱帯性ウミクサ類の開花、受粉特性の解明

■好きな言葉 実るほど頭を垂れる稲穂かな

■趣味 将棋、囲碁

■私的ローカル・ニュース 西表島のブロードバンド化

イベント情報

「DO YOU KYOTO?」キャンペーン
2009「京都地球環境の日」の
関連イベントに参加します

募集 知恵と文化の京都環境フォーラム
—低炭素社会づくりに生かす京の知恵
2009年2月14日(土) 13:30~16:30
(南禅寺龍淵閣)

暮らしや経済のあり方を見つめ直し、持続可能な社会を形成するために、京都の知恵と文化を生かした新たな生き方や暮らしを提案するフォーラムを、地球研と京都府の共催で開催します。

●申込み・問い合わせ先
京都府文化環境部 地球温暖化対策課
Tel : 075-414-4708 Fax : 075-414-4705
e-mail : ltikyu@pref.kyoto.lg.jp

募集 京都議定書発効記念活動交流イベント
—京野菜を食べよう(地産地消)
2009年2月15日(日) 11:00~15:00
(みやこめっせ(京都市勤業館))

京都議定書が発効した2月16日を記念し、日ごろから脱温暖化にむけた取り組みを実践しているさまざまな団体を一同に集めて、「DO YOU KYOTO?」(環境にいいことをしていますか?)を合言葉に活動交流会イベントが開催されます。地球研からは、ブース出展のほか、秋道智彌副所長、阿部健一教授などによるサイエンスカフェが開催されます。

●問い合わせ先
京都市総合企画局 地球温暖化対策室
Tel:075-211-9281

連携展示「子どもたちがつくる
『世界環境ポスター展』

告知 2009年2月11日(祝) 10:00~15:30
(立命館小学校)

人間文化研究機構の関連する研究者と教育現場の先生たちとの協働で、立命館小学校の児童を対象に「文化の問題としての環境問題」への理解を深めるワークショップを2月7日(土)・8日(日)に開催。世界各地の子どもたちから寄せられた環境ポスターを通して地域理解を深めます。このワークショップの一環として児童たちがプロデュースしたポスター展は校内に展示され、11日には一般市民にも公開されます。

●問い合わせ先 地球研研究推進戦略センター
Tel : 075-707-2459

イベントの報告

第29回地球研市民セミナー

報告 厳寒のシベリアに暮らす人々と温暖化
2008年11月21日(金) 15:00~16:30
(地球研講演室)

本セミナーは、井上元教授、高倉浩樹・東北大学東北アジア研究センター准教授による講演と、秋道智彌副所長を交えた3者のパネルディスカッションで構成されました。

井上教授からは、シベリアでの温暖化について、自然のプロセスのみならず資源開発やソ連邦崩壊という大きな社会変化の影響を考慮すべきであることや、パイプライン破損事故やメタンハイドレート開発がさらなる脅威になり得ることが指摘されました。融解した凍土から発見されたマンモスの牙などを用いて、すでに顕在化している温暖化の影響を紹介したほか、今後さらに融解深が大きくなり地表面の乾燥化が進んで森林が劣化する可能性を例に、凍土の凍結・融解プロセスを考慮したモデルの発展の重要性が強調されました。

高倉准教授からは、シベリアに暮らす先住民に関する調査結果をもとに、民族・言語的多様性の高さに比して生業様式が比較的類似していることや、なかでもとくにトナカイ牧畜の重要性について紹介がありました。また、レナ川中流域に多く居住するサハ人を例に、冬のごく限られた時期に行なわれる屠畜や飲料氷採取など生業のあり方が温暖化の影響を受けやすいこと、近年拡大するレナ川の洪水被害によって牧草地が湿潤化し、干草の確保が困難になっていることなどが指摘されました。

パネルディスカッションでは、シベリアでの資源開発が人びとの暮らしに与える影響や環境影響評価が機能していないことが議論されました。会場からは、原子力発電所の廃熱や先住民の保護政策に関する質問があり、廃熱より放射能汚染物質の廃棄が問題であること、ソ連邦崩壊後に保護政策が消滅したことが報告されました。(小林菜花子)



連携研究『人と水』
大学改革シンポジウム

報告 鳥海山から考える地域と暮らし
2008年11月15日(土) 13:00~17:00
(山形県飽海郡遊佐町鳥海山自然文化館「遊楽里」)

連携研究「人と水」では、山形県遊佐町と社団法人国立大学協会との共催で、山形県と秋田県の県境に位置する鳥海山の豊かな恵みをめぐる地域と人びととの関わりを考えるシンポジウムを開催しました。

前半は、地球研と関連団体から計8名の発表者による講演。まず、秋道智彌副所長がシンポジウム開催に至るまでの経緯を説明し、鳥海山をめぐる環境や歴史、文化について紹介しました。つづいて細野高啓・秋田大学工学資源学部助教は、鳥海山の地質と湧水との関連について解説。中野孝教教授は、鳥海山の地下に浸透する湧水の水質の特徴と生き物との関わりについて説明し、湧水を保全するには長期的な観測と、地域と研究者とが共同する仕組みづくりが重要であることを強調しました。また、谷口真人教授は、国内外での調査の結果、遊佐の海底から湧き出る地下水量は世界屈指であることを発表。佐藤秀彰・JA庄内みどり営農企画部遊佐営農課総括課長は、遊佐町の稲作農家が湧水から恩恵を受けている反面、農業などが環境に与える影響について考える必要があると話しました。

後半は、秋道副所長と森誠一・岐阜経済大学経済学部教授の司会によるパネルディスカッション。小野寺喜一郎・遊佐町長をはじめ関連団体から6名のパネリストを迎え、鳥海山の自然、生物、環境保全や地域開発のあり方などについて討論が交わされました。最後には、会場との熱心な意見交換も行なわれ、地域の宝物である鳥海山を守り活用していくことの大切さを確認し、盛況のうちに終了しました。(編集室)

研究活動の動向

国際シンポジウムを開催

報告 RIHN Kyoto Special Meeting on "Lao-Japan leadership on study on global environmental change and health in tropical Asia"

2008年11月28日 (金) 9:30~13:00
(地球研講演室)

研究プロジェクト「熱帯アジアの環境変化と感染症」(リーダー・門司和彦)による国際シンポジウムが開催されました。このプロジェクトは、2008年に終了した秋道プロジェクトの成果を継承し、ecohealthという概念に焦点をあて、対象地域を上げたもの。本研究の初年度ではありますが、すでに集積された豊富なデータに基づいて、今後の研究の展望を軸に、実質的な議論がなされました。

特筆すべきは、旭日大綬賞を受賞されたばかりのラオス・日本友好協会会長、ボンメーク・ダーラーロイ保健大臣にご臨席いただいたことです。大臣は、プロジェクト研究員のラオス/中国国境での調査に対する全面的支援を即座に約束。ラオスでの研究基盤が強固なものになりました。地球研プロジェクトを越えて、この分野での日本の研究者とラオス研究者との交流が促進されたことも、シンポジウムの大きな成果でした。(阿部健一)

スーダン科学技術大学と 覚書を交換

研究プロジェクト「アラブ社会におけるなりわい生態系の研究—ポスト石油時代に向けて」(プロジェクトリーダー・縄田浩志)では、スーダン科学技術大学との間で、両機関の学術交流と、スーダンにおける国際的な学問研究および共同研究の発展のため、アフマド・アルタイブ・アフマド学長とプロジェクトのコアメンバーでもあるアブドゥルジャッパール・パービクル教授に来日いただき、平成2008年11月27日に研究協力の覚書(MOU)と実施合意書(IA)を締結しました。

今後はとくにスーダン科学技術大学の農学部、林学部、獣医学部に所属の約30名の研究者とともに、地域生態系の変化や現地住民の生活基盤の崩壊など多くの問題を引き起こしている外来移入種マメ科プロソピスの統合的管理法の提示に取り組みます。(縄田浩志)

研究プロジェクト主催の研究会(実施報告)

2008年11月16日~2009年1月15日開催分

開催日	タイトル	主催者 (プロジェクトリーダー/プログラム等)	開催場所
11月16日	第2回焼畑サミットin鶴岡 「焼畑と野焼きの文化—今、東北が熱い!」	佐藤洋一郎	温海ふれあいセンター(山形県)
11月17日	村松FSプロジェクト第2回全体研究集会	村松伸	地球研セミナー室
11月17日	第3回イリプロジェクト研究会	窪田順平	地球研講演室
11月20日	第16回「人と自然:環境思想セミナー」 気配の痕跡—展示デザインと空間の記憶	佐藤洋一郎・ 文明環境史領域プログラム	地球研講演室
11月21日	セミナー 「湖南省における稲作考古学研究の新展開」	佐藤洋一郎	地球研セミナー室
11月22日	連続公開講座「ユーラシア農耕史—風土と農耕の醸成」 座談会『コムギが生まれたころ』	佐藤洋一郎	同志社大学今出川校地
11月22日	シンポジウム 「朱鞠内湖の森—人と自然のかかわり」	関野樹	幌加内交流プラザ 大会議室(北海道)
11月22日・ 23日	国際シンポジウム「環日本海北部地域の 後期更新世における人類生態系の構造変動」	湯本貴和	東京大学 本郷キャンパス
11月24日	FS研究「水の多様性の探求:循環を基軸にした 水管理に向けて」第3回研究会	中野孝教	地球研セミナー室
11月24日	第15回エコヘルス・プロジェクト研究会	門司和彦	地球研プロジェクト研究室
11月28日	第7回地球地域学プログラム研究会	地球地域学領域プログラム	地球研セミナー室
11月28日	RIHN Kyoto Special Meeting on "Lao-Japan leadership on study on global environmental change and health in tropical Asia"	門司和彦	地球研講演室
12月3・4日	アムール・オホーツクプロジェクト全体会議	白岩孝行	地球研セミナー室
12月4日	第16回エコヘルス・プロジェクト研究会	門司和彦	地球研プロジェクト研究室
12月5日	第25回レジリアンスセミナー	梅津千恵子	地球研講演室
12月5・6日	第6回レジリアンス・ワークショップ	梅津千恵子	地球研講演室
12月6・7日	列島プロジェクト全体集会	湯本貴和	地球研講演室
12月15日	第3回多様性領域プログラム研究会 「いま生物多様性研究に求められているもの」	多様性領域プログラム	地球研講演室
12月15日	講演会 「過去二千年における中国環境変化の総合研究について」	窪田順平	地球研講演室
12月20日	連続公開講座「ユーラシア農耕史—風土と農耕の醸成」 座談会『ムギという植物』	佐藤洋一郎	同志社大学今出川校地
12月22日	第17回「人と自然:環境思想セミナー」 拳に握りしめた雪のように:折口信夫と近代のゆくえ	佐藤洋一郎・ 文明環境史領域プログラム	地球研講演室
12月19日	第17回エコヘルス・プロジェクト研究会	門司和彦	地球研プロジェクト研究室
12月26・ 27日	ワークショップ「アジアの森林保護政策・制度 による人々の暮らしへの影響と対応」	山村則男	地球研講演室

招へい外国人の紹介



BALLATAYNE,
Rachel Mary
バラタイン・レイチェル・
メアリー

- 所属プロジェクト
農業が環境を破壊するとき
—ユーラシア農耕史と環境
- 招へい期間 2009年2月1日~4月30日
- 現職 ケンブリッジ考古学ユニット 環境スーパーバイザー、ケンブリッジ大学考古学部ピット=リバーズ研究所所長代理
- 専門分野 植物考古学(ヨーロッパ、南アジアの遺存種子、炭化材、パレンキマ分析)



POPOV,
Alexander Nikolaevich
ポポフ・アレクサンダー・
ニコラエヴィッチ

- 所属プロジェクト
東アジア内海の新石器化と現代化
- 招へい期間 2009年1月10日~4月9日
- 現職 ロシア極東国立総合大学 考古学・民族学博物館館長
- 専門分野 考古学(ロシア沿海州の新石器時代研究)

イベント情報

連携研究『人と水』シンポジウム「水と文明」

募集 2009年2月11日(祝) 13:00～17:00
(一橋記念講堂)

人間文化研究機構の連携研究『人と水』では、多面的な研究活動を実施しています。2007年度に実施した第1回「水と文明」シンポジウムにつづく第2弾となる今回のシンポジウムは、世界の諸文明における水問題に焦点をあて、アフリカのエジプト文明、サハラ砂漠のニジェール、インダス文明、タイのアユタヤ文明、中南米のマヤ・アステカ文明を中心に取り上げます。

●問い合わせ先 地球研「人と水」事務局
Tel: 075-707-2417

第5回地球研地域セミナー

募集 やんばるに生きる—生物・文化・
景観のゆたかさを育む観光

2009年2月13日(金)〈名護市民会館〉
2009年2月14日(土)〈国頭村比地公民館〉

沖縄本島の島北部「やんばる」は、日本列島の中でも飛びぬけて豊かな生物多様性をたもっています。やんばるの自然と文化的景観の豊かさは、その恵みに感謝しつつ、資源を枯渇させることなく利用してきた地域住民の生き方の多様性の反映であるともいえます。今回のセミナーは琉球大学観光産業科学部との共催で、やんばるの未来を考えるうえで「よりよい観光の役割とあり方」について、地元のみなさんとともに考えたいと思います。

●申し込み不要・問い合わせ先 地球研
Tel: 075-707-2470 Fax: 075-707-2507
e-mail: yumoto@chikyu.ac.jp

国際シンポジウム

募集 スラブ・ユーラシアの地域と環境
—公共性の視点からみた日本との比較

2009年2月28日(土)・3月1日(日)
(地球研講演室)

今回のシンポジウムは、地球研と北海道大学スラブ研究センターとの共催で、ロシア科学アカデミー太平洋地理学研究所・副所長のセルゲイ・ガンゼイ氏らの研究者を招いて開催します。旧ソ連東欧諸国(スラブ・ユーラシア諸国)における、自然環境の公共性、環境の公共財としての管理運営について、地球研ですでに進行しているスラブ・ユーラシアの環境に関わる複数のプロジェクトの研究結果と北海道大学スラブ研究センターでのこれまでの研究を検証し、今後の共同研究のあり方を討議をします。

●問い合わせ先 地球研研究推進戦略センター
Tel: 075-707-2149

第31回 地球研市民セミナー

告知 南極から地球環境がよく見える

2009年3月13日(金)〈地球研セミナー室〉
齋藤清明・地球研教授/白岩孝行・地球研准教授

南極は地球に残された自然のままの大陸です。この氷と雪の極寒の地で日本の観測隊は50年余、南極隕石やオゾンホールを発見をはじめ、氷床ボーリングによる過去の地球環境の解明などの成果をあげてきました。南極観測はまさに「地球環境を探る窓」といえるでしょう。

●申し込み・問い合わせ先 地球研総務課企画室
Tel: 075-707-2173 Fax: 075-707-2106
e-mail: shimin-seminar@chikyu.ac.jp

編集後記

地球研の未来可能性は？

プロジェクト研究発表会が12月に開催されました。各プロジェクトが、それぞれ1年間の成果を所内に問う、地球研でもっとも重要な会議。同僚の質問や意見、さらに評価を受け、今後のプロジェクトの運営や方向性に反映させてゆく、地球研のピア・レビューの場です。発表者と聞き手のやりとりは、どちらの側も力量を問われます。

今号には、研究発表会に参加した若手研究者4人の感想・評価を寄稿しています(特集4)。ここでの評価対象は個々のプロジェクトではなく、地球研そのものです。彼らの意見を受けて、さて地球研としてどのように対処してゆくのか。毎年同じようなことの繰り返しでは、地球研の未来可能性はありません。

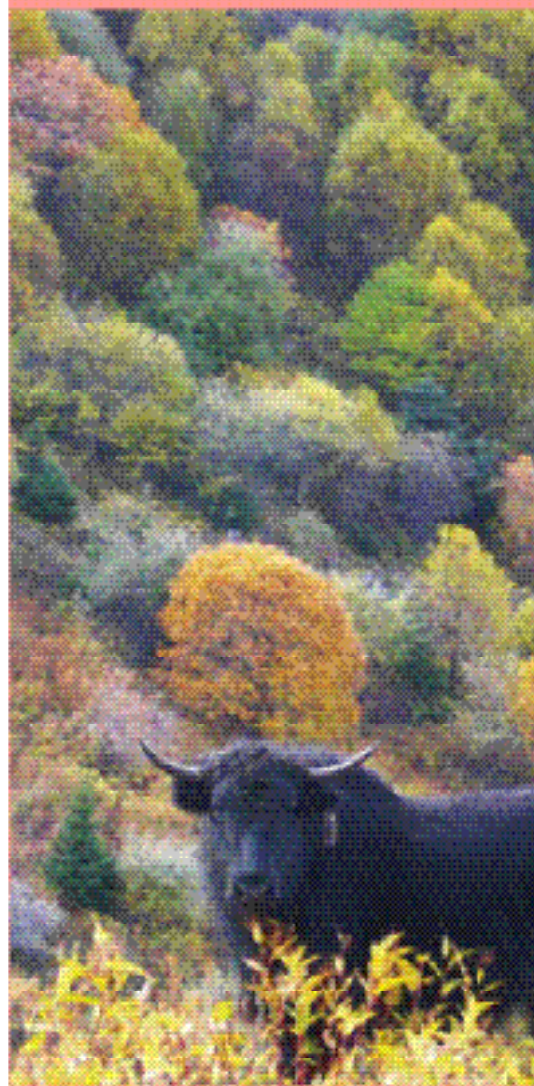
開催からやや時間は経ちましたが、第3回国際シンポジウムについても、所内スタッフによる検証を試みています(特集3)。すでに第4回国際シンポジウム実行委員会も立ち上がりました。経験をどのように繋げることができるのか、ご期待ください。(阿部)

編集委員●阿部健一(編集長)/湯本貴和/木下鉄矢/神松幸弘/遠藤崇浩/鞍田 崇

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
総合地球環境学研究所報「地球研ニュース」
隔月刊
Humanity & Nature Newsletter No. 18

ISSN 1880-8956

発行日 2009年2月1日
発行所 総合地球環境学研究所
〒603-8047
京都市北区上賀茂本山457番地の4
電話 075-707-2100 (代表)
E-mail newsletter@chikyu.ac.jp
URL http://www.chikyu.ac.jp



編集 定期刊行物編集室
発行 研究推進戦略センター

制作協力 京都通信社
デザイン 納富 進

本誌の内容は、地球研のウェブサイトにも掲載しています。郵送を希望されない方はお申し出ください。

本誌は再生紙を使用しています。